

『日蔭者ジュード』におけるハーディの結婚観

佐々木 清 明

The writer is not only influenced by society : he influences it. Art not merely reproduced Life but also shapes it.¹⁾

1892年から95年の間に書かれ、ハーディの最後の長編小説となった『日蔭者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)には、これまでの作品には取り上げられなかった諸種の問題が²⁾含まれており、彼の他の小説と比較して、より意識的かつ真剣に当時の社会及び諸制度を批判する創作意図が明白にあらわれている。

19世紀は激しい時代の推移を示した。政治、経済、社会生活上に大きな変化を及ぼした産業革命や、宗教、思想上に動揺をもたらした『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859)の出版とその進化思想が、精神的に物質的に多方面にわたって、当時の人々にどれ程大きな影響を与え、混乱をもたらしたかは想像に難くない。ハーディが生れ、成長し、創作活動をした時代はまさにこのような時期であった。

どのような作風に於ても、その書かれた時代、社会を反映していない小説はあり得ないと言ってもよい。特にヴィクトリア時代の作品に社会批判あるいは社会改革的意図が顕著にあらわれていることは、19世紀の時代思潮、社会状態の反映と言えよう。

『テス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)においては、教会の形式主義と僧侶の墮落等の宗教問題あるいは、当時の農村の貧困について特に叙述されているが、『日蔭者ジュード』では、ハーディが日頃考え、感じ、悩んでいたあらゆる問題がジュードを中心に有機的なつながりをもって提出されている。ジュードの悲劇は、教育と貧困、結婚と慣習、法律、宗教、セックス等々の問題が、ハーディの思想、

1) René Wellek and Austin Warren, *Theory of Literature* (Harvest Book, 1956), p. 90.

2) See Albert J. Guerard, *Thomas Hardy* (Oxford, 1949), p. 32.

人生観と結びついて、ジュードの悲劇性は一層深刻なものとなっている。これらの問題は要約すると社会と個人、制度と人間性の問題であり、当然ハーディの人間研究、人生考察の対象とならざるを得ないテーマであった。

ハーディは、この作品執筆の目的を序文で次のように述べている。

For a novel addressed by a man to men and women of full age ; which attempts to deal unaffectedly with the fret and fever, derision and disaster, that may press in the wake of the strongest passion known to humanity ; to tell without a mincing of words, of a deadly war waged between flesh and spirit ; and to point the tragedy of unfulfilled aims, I am not aware that there is anything in the handling to which exception can be taken.³⁾

つまり男女の関係を赤裸々に忠実に描くことであり、彼が中心テーマとしたものは結婚問題であったと言えよう。

この小論は、主人公ジュードの生涯を通じて、ハーディがそのテーマをどのように展開し叙述しているかをたどりながら、彼の結婚観を考察して見たものである。結婚に関する問題は、現代に於てもなお一層重要性をもち、種々の論議を呼んでおり、しかも本質的にはハーディによって結婚が、社会と個人、制度と人間性にかかわる重要な問題として提起されているが、その問題の重要性は現在も変りはないであろう。

1

ジュード・フォーレイ (Jude Fawley) は両親がなく、叔母ドルスィラ・フォーレイ (Drusilla Fawley) の家にあずけられている。彼は感受性が強く、また読書の好きな少年で、まさに幼い日のハーディを偲ばせる人物である。ジュードは学問の都クライストミンスター (Christminster—実地名 Oxford) で勉強をしたいと思いい、労働に従事しながら独力でラテン語、ギリシャ語を学び、読書に没頭していた。しかし彼のおかれた境遇と貧困の為に、向学心に燃えた希望は容易に実現され得るものではなかった。ジュードが19、20歳頃アルフレッドストン (Alfredston) の小

3) Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, Preface, p. vi. 以下同書の引用は Pocket Edition (Macmillan) による。

さな町へ石工の見習いとして通っていた。その頃、彼の前に、えくぼを浮かべ彼の情欲をそそるような姿態をした女性アラベラ・ドン (Arabella Donn) があらわれる。彼女は異性に対する好奇心が非常に強く、魅惑的なえくぼを作り、ジュードの心を引きつけてしまう。ジュードは一時の快楽に思慮分別をもろくも失ってしまい、そしてアラベラから妊娠したことを知らされる。彼はクライストミンスターに行き、牧師になろうという計画を断念し、自分の肉欲の過ちの責任をとり彼女と結婚する。アラベラは結婚して数週間後に、妊娠したと思ったのは、自分の勘違いだったと事もなげに言う。ジュードは自分が結婚しようと決心した経緯を思いかえし考えてみる時、自分が社会の通念に押し流されて、将来の希望を捨てて結婚したのだと気がつき、この世間一般の結婚に対する観念が、自分の行動に如何に強く作用していたかに改めて眼を見張るのだった。そして、一時の本能のいたずらのために、男の一生の計画を抹殺しなければならなくなったのも、この社会の習慣のためではないかと考える。

ハーディが「女のために本性を失なった」⁴⁾ジュードの悲劇の一要因として提起している問題は、結婚とその社会慣習についてである。彼女が妊娠していなかったという事実によって、彼が結婚を決意した直接の理由はなくなったものの、結婚したという事実は残っている。ジュードはこのような社会の慣習に不当なものがあるように思わざるを得なかった。ここに結婚の制度、法律上の問題が出てくる。

ジュードとアラベラの結婚は、全く社会の習慣に従った結果に過ぎず、二人の精神的な結びつきは最初からあり得なかった。また彼等の結婚生活はジュードの石工としての収入だけでは償いきれず、経済的にも破綻をきたし、結局二人の間には、ひとかけらの愛情も見出すことは出来ず、唯束縛のみ感ずるばかりであった。このような索莫たる結婚生活は長く続くはずがなく、短期間で破れてしまい、アラベラは実家に戻り家族と一緒に、他の男を得て南米に移住してしまう。離婚は当時容易に認められるものではなく、ジュードはアラベラとの結婚は法律上解消してしまう訳には行かなかった。⁵⁾

ハーディは、結婚が「親和性 (affinity)」と何の関係もない一時の感情でなされ

4) Ibid., p. 2. 各編の冒頭に Hardy が引用している文章は、それぞれ各編の leit-motif となっている。

5) 高橋源次著『文学論序説』(篠崎書林, 昭和31年) 参照。英国の離婚制度について詳述されている。

たところに根本的なあやまりのあったことを指摘すると同時に、人間の弱点である一時的本能のあやまちの結果に対する社会通念や慣習の潜在的抑圧また結婚の制度上の束縛が、いかに不当なものであるかを訴えている。

それまで、ハーディの如く率直に離婚を問題にした作家は少なく、20世紀に入ってからゴールズワージー (John Galsworthy, 1867-1933) が離婚問題をテーマとして取り上げ、ハーディの考えと根本的に同じように、結婚に対する精神的な結びつきを強調し、そのない結合は動物的な結合にすぎないとして、法律的にもそのような婚姻の解消を認めるよう主張している。『日蔭者ジュード』には、他に排他的な当時の大学制度に対する批判等も含まれているが、この作品がディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の小説程ではないが社会改革を促進する影響力となったであろうことは充分認められよう。⁷⁾

アラベラとの結婚生活に破れた後、ジュードは従妹のスー・ブライドヘッド (Sue Bridehead) に対して、愛情を求めるといふよりむしろ精神的なものを期待し、自由に交際しようとしている。スーは知的で繊細な神経をもった女性で、肉感的なアラベラとは全く対照的な人物である。彼女は社会の慣習による肉体上の結びつきを絶対的の要件とする結婚に対して、精神的な結合が重要であると主張している。

テス (Tess Durbeyfield) とスーの女性としての結婚に対する態度には対照的な相違があるように思われる。テスは不幸にもアレック・ダーバヴィル (Alec d'Urberville) の毒牙に身をけがされたが、エンジェル・クレア (Angel Clare) との清純な全くプラトニックな恋のよるこびにひたっている。テスとエンジェルとの結婚をはばんでいるのは、エンジェルの結婚観がお上品なヴィクトリア朝の道德観による偏見にもとづいたものであったからである。それに対しテスは、無学で、素朴な農村女性であり、結婚に対する何らの考えもなく常に受動的な態度を示している。

スーは近代の思想の洗礼を受けた新しい婦人の一人である。彼女は、世間の男性に対して何の恐怖も抱いていないと言い、また男性との精神的な交際だけで生活することが出来ると思っている。最初に彼女と交友関係を結んだクライストミンスター⁶⁾の大学生は、彼女との奇妙な恋愛関係に破れて病死する。スーは進歩的な考

6) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 81.

7) Cf. A. Alvarez, 'Jude the Obscure,' in *Hardy* (A Collection of Critical Essays), ed. by Albert J. Guevard (Spectrum Book, 1963), p. 115.

えをもち、個性的な自由な結婚観をいだいている。

テスは無知で純朴で消極的な生き方をしているのに対して、スューは教育を受け理知的で、自我を主張するいわば近代女性である。われわれはテスの生涯、スューの結婚観に、ハーディの女性観をうかがうことが出来る。二人の女性は19世紀のイギリスの農村や都会に見られた女性達であり、ハーディのリアリスティックな観察にもとづく印象的な描写によって二つの典型的な女性像となっている。

ハーディは、スューとアラベラという対照的な女性との交情を通じて、ジュードの霊と肉との葛藤をえがき、社会の慣習と結婚の問題について彼の考えを明確にあらわそうとしている。ハーディはスューの言葉の中で、世間の人々の男女関係に対する見方が如何に偏狭であるかを指摘している。

‘... Their philosophy only recognizes relations based on animal desire. The wide field of strong attachment where desire plays, at least, only a secondary part, is ignored by them—the part of—who is it?—Venus Urania.’⁸⁾

当時の一般の人々の男女関係に対する見方は肉欲的な面からしか考えられていないことに対して、ハーディは、強い情愛で結ばれた人間的で自由な関係のあることをスューの言葉を借りて述べている。ハーディは、キリスト教的禁欲主義がもたらしている性道徳や結婚制度に対して懐疑的であり、彼の結婚観の根底には、異教神で精神的愛の象徴であるヴィーナスを引きあいに出していることでもわかるように、ヘレニズム的な観念が認められる。

結婚という法律手続きや、教会の儀式によって生れた結果は、如何に「親和性」の欠如せる男女をも夫婦として認めさせる力をもっている。ジュードとアラベラの結婚が、教会の儀式によって生れた偽瞞であり、二人は性格も西と東ほど異なっている単に名目上の夫婦にすぎないのであるから、法律上の結婚解消を当然認めるべきであることをジュードの苦悶を通じてハーディは主張している。

2

スューとフィロットソン (Phillotson) との結婚も、スューの思想と矛盾した、全く一時的な感情による、愛情の欠如せる結婚であった。彼等も結果的にはジュー

8) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 201.

ドとアラベラが経験した同じような結婚生活を営なまざるを得なかった。ジュードはフィロットソン夫人となっているスューに対する恋情を抑えることが出来ないし、スューもまた、ジュードを忘れられないばかりか一層彼に会いたい気持がつのるばかりであった。ジュードはスューの招きに戸惑いながらも、会うことをどうしても断念することが出来ない。ハーディは彼の心中を次のように説明している。

He knew he should go to see her again, according to her invitation. Those earnest men he read of, the saints, whom Sue, with gentle irreverence, called his demi-gods, would have shunned such encounters if they doubted their own strength. But he could not. He might fast and pray during the whole interval, but the human was more powerful in him than the Divine.⁹⁾

キリスト教が、どれ程根強くキリスト教徒の社会生活や個人の行動を規制しているかは異教徒のわれわれには想像以上のものである。¹⁰⁾まして牧師を志望しているジュードが、夫のある女の招きに、心さえも動かすべきではないのに、彼の心は神性より人間性の方が強く、彼女に逢いに行きたい気持をどうすることも出来ない。

法律上、妻帯者であるジュードと夫のあるスューは、フォーレイ叔母の葬儀の時に顔を合わせ、彼女からフィロットソンとの結婚生活に於る悩みを聞き、一層ジュードはスューに対する愛情がつのって行く。夫のある女が自分の悩みや秘密を他の男に打ち明けることは宗教上の罪悪であると考えていたジュードは、彼女への愛のために、そのような教義や宗教を棄ててもかまわないと思うほどであった。教義上の問題は二人にとっては単なる桎梏でしかないように思われ、人間性を無視した宗教を棄ててもよいと一時は考えもするが、しかしジュードはどうしても不義な関係をもつことの罪の意識から逃れられない。

ジュードの煩悶は、『テス』におけるエンジェルの苦悩より一層深刻なものとなっている。聖職を志しているジュードには、スューとの恋愛は、その初志と全く矛盾することになる。最初はアラベラのために大学教育を受けたいという大志を阻まれ、今度は僧職につきたいという抱負もスューによって阻まれ、ジュードは己の恋とその罪の意識に懊悩し、自分の志す道の前に立ちはだかる女性について考え、彼は次のような疑問を投げかけている。

9) Ibid., p. 246.

10) 「…神が合せられたものを、人は離してはならない」(マタイ伝、第19章、第6節)という思想が離婚禁止の教義上の根拠となっていること等。

‘Is it,’ he said, ‘that the women are to blame ; or is it the artificial system of things, under which the normal sex-impulses are turned into devilish domestic gins and springs to noose and hold back those who want to progress?’¹¹⁾

ハーディは、人間の作った不自然な制度によってゆがめられた性の問題を提起しており、この問題の発展は D. H. ロレンス (D.H. Lawrence, 1885-1930) につながるものである。

苦悶した末、ジュードは自分が掟を守る宗教家になるような人間ではないことを悟り、全く自信を喪失し、所有していた神学書や倫理学の本を土中に埋めあるいは焼いてしまう。焼却することによって、聖職につこうとしていた偽善的な自分から普通の人間として解放されたような気持になる。

He might go on believing as before, but he professed nothing, and no longer owned and exhibited engines of faith which, as their proprietor, he might naturally be supposed to exercise on himself first of all. In his passion for Sue he could now stand as an ordinary sinner, and not as a whited sepulchre.¹²⁾

以上の引用から、ハーディの宗教観、人間観がかなりはっきりと浮かぶことが出来る。

『日蔭者ジュード』の title-page に “The letter killeth” (儀文は殺す) という言葉をコリント後書第3章6節から引用しているが、ハーディはこの作品をキリスト教的社会制度のもつ、非人間的因襲への抗義の叫びとして著しており、この聖書の言葉をアイロニカルに使用していると言えよう。

再びフィロットソンのもとに戻ったスューの所へ、ジュードは雨の中、病をおして会いに出かける。彼女を教会に呼び出して、自分の妻として戻るよう懇願して、‘Don’t then be ummerciful. Sue, Sue! we are acting by the letter, and “the letter killeth”!’¹³⁾ と叫んでいる。ジュードはアラベラとの再婚は虚偽の契約だと言い、「虚偽の信仰によってもたらされた情緒の悦楽に耽っているのか、理性的で

11) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 259.

12) Ibid., p. 260.

13) Ibid., p. 465.

因襲を侮蔑していたお前はどうしたのだ」とスューにつめよる。彼女は、フィロットソンとの結婚は、‘a church marriage—an apparent marriage’¹⁴⁾だと告白する。両者のそれぞれの結婚は、結局慣習上、教義上の単なる儀式によるもので全く人間性が無視されており、この聖書の引用は離婚を認めない教会の儀文に対し、また因襲的な制度上の欠陥を鋭く批判しているものと言える。

卑劣な策略等によって結婚し、それが非常に不幸なものであることがわかった場合、「かつて結婚を結ばせた国家や教会は、その動機が愛情や道徳的であるかどうか、または単に、卑しい利己心からであるかどうかについては問題にしなかったのに、今度は離婚について極力妨害する」¹⁵⁾とハーディと同年に生れたベーベル (August Bebel, 1840-1913) は彼の主著『婦人論』(1879)で述べているが、単に形式的、儀式的に行なわれた結婚が、如何に不幸な結果をもたらしている場合でもその解消を困難にしている矛盾不当性を鋭くついている。

3

スューはジュードからアラベラとの結婚の顛末を聞き、またジュードと会っていたことが原因で師範学校の退校処分を受けたことによって、社会の因襲を無視する自由主義的な彼女の主張は萎縮し、臆病になり、ただ世間体をつくろう気持から、結婚を単なる形式と考え、その拘束力を充分認識することなく、フィロットソンと結婚してしまう。彼女が結婚する意志決定をした原因、理由には、ジュードがアラベラと結婚せざるを得なかった事情と共通している点がある。退校処分を受けた際に彼女に示してくれたフィロットソンの親切心に動かされ、急に結婚に踏み切ってしまう、その直後にやはり後悔の念に悩まされている。どうしても愛情を感じることの出来ないフィロットソンとの生活は倅せであるはずがなく、スューは夫の教育者という社会的立場も感情をも無視して別居の申し出をする。スューは J. S. ミル (J. S. Mill, 1806-1873) の言葉を引用しながら、彼の承諾を得ようとする。

‘She, or he, “who lets the world, or his own portion of it, choose his plan of life for him, has no need of any other faculty than the ape-like one of imitation.” J.S. Mill’s words, those are. I have been reading it up. Why can’t you act upon them? I wish to, always.’¹⁷⁾

14) Ibid., p. 467.

15) ベーベル著『婦人論』(森下修一訳)(角川文庫, 昭和30年), 上巻 p. 159.

16) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 267.

17) Ibid., p. 267.

スューはミルの『自由論』 (*On Liberty*, 1859) の一節を楯にとって、フィロットソンの妻としての立場に立ってではなく、個人として自我の主張をし自分の自由を強要する。フィロットソンは妻がジュードと共に生活していることを認めることは、別居という問題以上に不名誉であるばかりでなく異常な「妻君譲渡」という社会問題を起すことになり、自分の教育者としての社会的立場上、到底許すわけには行かず、窮地に追いこまれる。彼女は論鋒鋭く、夫自身が愛読しているフンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) の著書からの言葉を引いて、次のような手紙を出す。

‘... To produce “Human development in its richest diversity” (to quote your Humblodt) is to my mind far above respectability...’¹⁸⁾

ハーディはミルの『自由論』を、その出版直後に暗記するほど熟読しており、この論文は青年ハーディの思想形成上、強烈でしかも多大の影響を与えている。このフンボルトの引用も、ミルが『自由論』の中に引用している言葉である。『自由論』第三章の最初の部分に概略次のような主旨のことが書かれている。個性の伸張には境遇の多様性と自由が必要であり、また、習慣として無条件に習慣に服従する時、その人独自の能力を発達せしめることが出来ないと論じている。¹⁹⁾ 個性を尊重すると言うことは、当時は、非常に進歩的な一部の人の考えでしかなかったのである。フィロットソンは彼女を苦しめたくないという同情心から、妻の真剣な願いに同意する気持に傾く。

フィロットソンはスューとの別居の問題を親友であるギリンガム (Gillingham) に相談をし、自分は、別居を認めようと思っていると話す。ギリンガムは、スューとジュードのような従兄妹同志の同棲を認めれば、重大な社会問題となり、家庭は崩壊され、夫婦の家族形態は社会の単位とはなくなること指摘し、別居を認めることを思いとどまるよう説得する。それに対しフィロットソンは、実際善良な女性から自己の解放を求められた場合、それを認めることは夫として、論理的にも宗教上からも何ら弁護の余地はないが、スューとジュードの純粋な愛情を知るに及んで、むしろ彼等の生き方に共鳴してやりたい気持になると語る。別居を避けるようにとの友人の忠告にも耳をかさず、彼はスューの申し出に同意したために、学校

18) Ibid., p. 268.

19) J. S. ミル著『自由論』(早坂忠訳)(中央公論社, 昭和42年), pp. 280-282 参照。

委員の詰問を受けることになる。その時彼は次のように答弁している。

‘She asked leave to go away with her lover, and I let her. Why shouldn’t I? A woman of full age, it was a question for her own conscience—not for me, I was not her gaoler. I can’t explain any further. I don’t wish to be questioned.’²⁰⁾

またギリングムに自分のとった処置が「全く自然でまっすぐな人間性」に基いた行為であり、どうして自然な慈悲の行為が道徳に反するのかわからないと述べている。法律上、道徳上、宗教上などの観点からも許されないスューの願いに対してとったフィロットソンの言動は、人間性を無視した結婚は強制されるべきではなく、当然離婚をも認めるべきであると言うハーディの主張のあらわれである。そして、それは同時にヴィクトリア朝の道徳観や、教会の形式的な結婚に対する因襲的観念を打破すべきである点を強調していると言えよう。

1891年に、ハーディが寄稿していた雑誌 ‘Fortnightly Review’ に「結婚と自由思想」(‘Marriage and Freethought’)²¹⁾ という記事が発表されている。自由で進歩的な考えをもっている者が、こと結婚の問題になると結婚の契約の不可侵をとえ、その思想原理に反する意見を固執していると述べ、この問題に対する論理的考察を求めている。その頃に離婚問題で世間の注目をあつめた事件²²⁾があったり、また、ハーディ自身最初の妻エマ・ラヴィニア・ギフォード (Emma Lavinia Gifford) との生活が決して明るいものではなかった事などが、この作品執筆の背景にあることは、ラットランドの解明している所である。つまり、これらの事実はこの作品の社会性あるいは伝記的要素を濃厚にしているものであり、非常に暗い現実感を与えている所以でもある。

ハーディは1891年に設立されたイブセン (Henrik Ibsen, 1828–1906) の劇の上演を目的とする「独立演劇協会」(Independent Theatre Association) の発起人としてメレディス (George Meredith, 1828–1909) やムーア (George Moor, 1852–1933) らと共に名をつらねている。彼はこの作品執筆中に上演された『ヘッダ・ガーブラー』(1890)、『ロスメルスホルム』(1886)、や『ソルネス建築士』(1892) を観劇し

20) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 294.

21) William R. Rutland, *Thomas Hardy* (千城書房版, 昭和37年), pp. 251–2.

22) Ibid., p. 250. ‘Parnell case’ を指す。

23) ている。スューの言動やフィロットソンの「わたしは妻の牢番ではない」という言辞には、明らかに、ハーディがイプセンの『人形の家』(1879)や『幽霊』(1881)を読んでいたことを立証するものであり、彼の結婚観にはイプセンの影響をも受けていることがはっきりとうかがわれる。

『日蔭者ジュード』の最後の二編では特に悲劇的で象徴的な事件が読者の胸を打つ。ハーディは結婚、貧困、社会制度について、あるいは教育制度に対する不満や宗教問題などに関して、第五、六編で自分の大胆率直な見解を表明している。ジュードとアラベラとの間に生れた11歳になる少年が、スューの二人の子供を殺害し、そして自ら縊死する場面は、読者をして目をおおはしめる悲惨な情景を呈している。果して年端もいかない少年が二人の子供を殺して、自殺するという行為は実際可能か否かという論議を生み、また、当時の近代産業の発達に伴う人口の都市集中化による住宅難、貧困と多産の問題等の社会問題に対して、読者が強い関心を示している。これらの問題は19世中葉以後の英国社会における現実の深刻な問題であった。ハーディはおそらく少年が殺人をし、自殺するというあり得べからざるような事件を描くことによって社会改革の必要性和近代社会の将来への警鐘としたのであろう。ジュードの長男の死は「新しい人生観の所産」であるとハーディは述べているが子供特有の直観力と鋭い感受性によって自分の不幸の原因を感じとり、将来に対する夢を失なった結果に他ならない。ハーディ自身の幼い頃に感じた、自分は無用な存在だという意識と、ジュードの如き苦難な道を歩ませたくないという彼の厭世的な思想の産物でもあるとも言える。子供にさえ生きようとする意欲を失なわせる社会状況についての叙述によって、読者は現実への眼を開かせられたことは事実である。

スューは、外部の何者かがお前は学問をしてはいけない、働いてはいけない、愛してはいけないと言っているようだと、抑えがたい悲嘆の叫びを上げている。ジュードの不運な人生は、閉鎖的な社会によって自分の進むべき道をことごとく断たれた為であったと言えよう。スューとジュードとの俸せであるべき結合が、全く思いがけぬ一度に三人の子供の死によって完全に暗転してしまい、スューはジュードに次のような述懐をしている。

‘... We said—do you remember?—that we would make a virtue of joy.

I said it was Nature’s intention, Nature’s law and *raison d’être* that we

23) Ibid., p. 252.

should be joyful in what instincts she afforded us—instincts which civilization had taken upon itself to thwart. What dreadful things I said! And now Fate has given us this stab in the back for being such fools as to take Nature at her word!²⁴⁾

スューの自然への讃美と自由主義的思想は、幼い子供の死亡によって、根底からくつがえされ、「運命 (Fate)」の前にもろくも挫折してしまう。皮肉にも彼女は以前の言動とは逆に、社会や教会の慣習を肯定するようになり、ジュードはあくまでも、この運命に抗し、スューとの生活を守り通そうとしている。しかし、スューは教会だけの表向きの結婚を挙げたフィロットソンのもとに戻り、その結果、ジュードは全く自暴自棄となり泥酔中にかつてあれ程離婚を願った女性アラベラとの再婚を承知してしまう。それから数ヶ月後にジュードは健康を害し病床に臥し、アラベラの足手まといとなる。ジュードはどうしてもスューをあきらめきれず、病を押して雨の中を彼女に会いに行く。そしてそれが原因で死期を早め、部屋に戻るや、苦悩に満ちた悲劇的人生に永遠の別れを告げる。

4

『日蔭者ジュード』において、ハーディは小説という形式を十分に生かして、読者に人生について語りかけ、彼の言わんとするところを率直に述べていると思われる。ハーディは当時の因襲的な結婚観や性道徳、あるいは結婚制度に対して懐疑や批判をいいていた。そのことは主人公ジュード、スューあるいはフィロットソンの結婚に関する既成概念あるいはキリスト教的結婚観に対する深刻な疑問、苦悩となってあらわれている。

19世紀は政治的、経済的、社会的環境に大きな変革があり、思想的にも合理的、実証主義的思考なり、進化思想の影響によって自由主義的風潮が生れている。結婚は単に個人の問題ではなく、このような社会背景の中で考えなければならない重要な問題として人々の関心を引くようになり、特に19世紀中葉以後、社会対個人の問題としてジャーナリズムにもとり上げられるようになった。この作品の執筆の動機には、勿論このような時代背景があり、ハーディは旧来の結婚のあり方に対する不満を吐露している。

24) Hardy, *Jude the Obscure*, p. 405.

ジュードがアラベラとの離婚を強く望みながら、ヴィクトリア朝の一般的な結婚に関する社会通念や制度にはばまれ、履行出来ない。しかし彼は人間通有の弱点とも言うべき欲望の虜となったために、己むを得ず結婚してしまったのであり、このような最初から親和性を欠いた結合に対して、ハーディは既成概念にとらわれない個人の自由意志にもとづく婚姻の正当性を、換言すれば個人主義的結婚観を明らかに示している。同時に、離婚に対する制度上あるいは教義上の制限、あるいは呪縛から解放しなければ、有為な人間の一生も台なしにしてしまうと警告しているのである。

ハーディは進化思想あるいは自由主義の洗礼を受け、進歩的で進取の精神に富んだ努力の人であり、透徹した人間観をもっていた。彼は実人生のあらゆる矛盾相剋や無秩序な実態に対して、それらに抗して理想を達成すべき社会改造の必要性を認識してはいたが、その結果に対しては悲観的であったようだ。幸福な結婚を目指しながらジュードとスューは、この世の最も悲惨なと言ってもよい程みじめな運命を経験しなければならなかった。それは、当時の都市の急激な人口増加にともなう住宅事情の悪化あるいは低賃金による生活の困窮、またはそのような悪条件の下での多産などの精神的物質圧迫が加わったためである。ジュードには、同じあやまりを二度おかす（アラベラとの二度の結婚に見られるような）自制心の足りない衝動的な行動が見られ、スューも同様な（フィロットソンとの結婚に見られるような）人間的な弱さを持っている。この点から見れば二人は自ら悲劇を招いたとも言える。このような人間的な過失ともいえる軽卒な結婚によって生れた家庭悲劇に対して、あくまでも人間性に根ざした離婚容認の要を説いているのである。

ハーディは結婚と制度の問題をあくまでも人間性にもとずいて解決すべきであると考えていると同時に、人間男女のあるべき姿を摸索していたと思われる。つまり法律上の改正によってのみ因襲的結婚制度の非人間的問題点は全く解消してしまう訳ではなく、もっと根本的に人間男女の結びつきを考察しようとしている。また人間である限り不可避の苦悩ともいえるべき霊と肉の相剋は、ジュードにおいてアウグスティヌスの苦闘を思わしめるものがある。ジュードと同様に煩悶しているエンジェル・クレアもクリム・ヨープライトも平安な結婚生活を営むことが出来ない。禁欲生活を実行しようとしあるいは、全く新しい男女関係を理想として行動しようとしているジュードやスューは、ハーディ自身の内面的苦悩を跡づける人物達といえよう。

この作品において、ハーディは結婚にともなう諸問題を、人間そのものに肉迫し

て誠実に描いており、また社会との関連において、その問題点をとらえている。
「近代の男女が前代の男女があったよりも、結婚における不仕合せを堪え得なくな
ったということは真実である。これは結婚の理想主義が前より一層大いなる要求を
為していることを示すものである²⁵⁾」と、ハーディと同時代のスウェーデンの婦人思
想家エレン・ケイ (Ellen Key, 1849-1926) は述べている。ジュードやスューの個
人主義的自由意志にもとづく結婚生活に対する理想や希望は現実の社会、経済事情
によって変更を余儀なくされ、挫折せざるを得なかった。ハーディの結婚観には、
19世紀の社会的背景と時代思潮によって形成された非常に革新的な思想が認められ
るが、結局そのようなハーディの結婚観はまだ当時の社会には受け入れられなかつ
たのである。

25) エレン・ケイ著『恋愛と結婚』(原田実訳)(岩波文庫、昭和6年)、下巻 p. 99.